



## 第14回 IIBC 高校生英語エッセイコンテスト

テーマ

### 身近な異文化体験

～コミュニケーションを通じた響きあい～

#### 本コンテストの狙い

グローバル化が急速に進展する現在、将来グローバルに活躍するであろう高校生の皆さんに、異なる文化を持つ人々と関わり合う大切さを見つめ、考える機会を持つこと、自分が考えたことを英語でしっかりと表現する能力を養う場を提供すること、を狙いとしています。

#### 身近な異文化体験とは

例えば、自分とは異なる価値観を持つ相手は「異文化」と考えることができますので、海外での体験に限りません。

#### 受動にとどまらず、能動的な関わり合いを表現すること

体験した異文化の紹介にとどまることなく、それらの体験、相手との関わり合いを通じて、自身がどのように変わったのか（影響を受けたのか）、相手がどのように変わったのか（影響を与えたのか）を英語で表現してください。

主催

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 (IIBC)

後援

米国大使館

協賛

一般社団法人 日米協会

### 特別インタビュー

- 審査員長 (IIBC理事長) 大橋 圭造
- 慶應義塾湘南藤沢高等部 矢野 絵理奈 さん
- 北海道札幌国際情報高等学校 木村 準一 先生
- 審査員 (東京国際大学教授) 松本 茂 先生

# 応募規定

## 応募資格

日本の国公立高等学校、高等専門学校(1～3年)および中等教育学校(4～6年)に在学し、英語が母語でない生徒お一人様、1作品とします。

### 本選

- ・学校単位での応募となります。審査対象になる作品の応募は1校あたり2作品まで。
- ・校内選考の実施は各学校のご判断にお任せいたします。

### 奨励賞

- ・学校単位での応募となります。
- ・対象になる作品の応募は1校あたり20作品(20名)以上。
- ・本選応募者は除きます。

## 使用言語

英語

## 応募作品

エッセイ 501語以上700語未満

(全ての応募作品にネイティブスピーカーによるコメントをつけてフィードバックいたします。)

### 注意点

- ・自作未発表のものに限ります。・翻訳ソフトの使用は禁止します。・タイトル・カンマ・ピリオドは語数に入れません。
- ・エッセイは、手書きではなくWordファイルで作成してください。
- ・語数オーバー・不足は失格とし、個別フィードバックはいたしません。
- ・エッセイ内で他者作成の文章の引用が必要な場合は、引用箇所印をつけ、必ず引用元を記載してください。記載のない場合には失格とし、個別フィードバックはいたしません。

## 応募期間

2022年6月1日(水)～9月5日(月) 17時まで

応募方法の詳細は公式サイト(<https://iibc.me/essay>)にてお知らせいたします。

**応募フォームは6月1日(水)より受け付けます。Wordデータでご応募ください。**

- ・インターネットのシステム障害やメールアドレスの誤りにより、個人情報および応募作品を紛失された場合の責任は負いかねますのでご了承ください。
- ・本選・奨励賞ともフィードバックをつけたエッセイは、11月中旬以降にご応募いただいた先生のメールアドレス宛にお送りします。
- ・ご応募いただいた先生、生徒様への参加賞の贈呈はございません。ご了承ください。

### 本選

- ・エッセイの形式は**公式サイト上の書式見本**に従ってください。
- ・公式サイト上の**【本選応募用】応募フォームに必要事項を入力**し、エッセイ作品(Wordファイル)を添付して送信してください。
- ・**1校あたり2作品まで**でご応募いただけます。2作品のご応募の場合、1つの応募フォームで手続きを行ってください。

### 奨励賞

- ・エッセイの形式は**公式サイト上の書式見本**に従ってください。
- ・**全てのエッセイ作品(Wordファイル)のファイル名に連番をつけてください。** 例)IIBC-01.doc、IIBC-02.doc
- ・**連番をつけた全てのWordファイルを圧縮して1つのファイルを作成**してください。  
ファイルの圧縮形式はZIP形式またはLHA形式としてください。  
圧縮したファイルの容量が10MB以上になる場合は、IIBC高校生英語エッセイコンテスト事務局までお問い合わせください。
- ・公式サイト上の**【奨励賞応募用】応募フォームに必要事項を入力**し、圧縮したファイルを添付し、送信してください。
- ・**応募フォームへ入力した「参加人数」と、送付するエッセイの数が同数であることを必ず確認の上、圧縮、送信してください。**

## 応募方法

## 問い合わせ先

(一財)国際ビジネスコミュニケーション協会 IIBC高校生英語エッセイコンテスト事務局  
E-Mail: [iibc-essay@iibc-global.org](mailto:iibc-essay@iibc-global.org)

## 著作権

主催者に帰属します。

# 審査(本選作品対象)

## 審査

審査基準に基づきエッセイを総合的に評価します。  
審査時には、学校名・生徒氏名は除き、エッセイ本文のみを採点します。



東京国際大学教授  
立教大学名誉教授  
NHKラジオ「基礎英語」シリーズ全体監修者  
**松本 茂 先生**



桜美林大学  
教授(国際経営)  
異文化経営学会会長  
**馬越 恵美子 先生**

## 審査員 (順不同)



ジャパン・インターカルチュラル・  
コンサルティング 社長  
**ロッシェル・カップ 様**



公益財団法人 東洋文庫  
専務理事  
ハーバード大学アジアセンター  
国際諮問委員  
**杉浦 康之 様**



一般財団法人  
国際ビジネスコミュニケーション協会(IIBC)  
理事長  
**大橋 圭造 (審査員長)**

## 審査基準

### 一次審査

IIBC高校生英語エッセイコンテスト事務局がエッセイを評価します。

### 二次審査

各審査員が一次審査を通過したエッセイを評価します。(構成・表現力・文法/語彙など)

## 審査結果

入賞者に対して2022年10月中旬以降、応募いただいた先生のメールアドレス宛に通知の上、  
公式サイトにて入賞者および入賞作品を発表します。

## 表彰・賞品

**本 選:最優秀賞(1名) / 優秀賞(1名) / 優良賞(1名) / 特別賞(5名) / アルムナイ特別賞(1名)**

最優秀賞を受賞された方には、国内研修プログラムまたは同額のノートPCを贈呈予定です。  
アルムナイ特別賞は、本コンテスト受賞者(アルムナイ)が審査員となり、独自の観点で  
優れた作品(1名)に贈られます。

**奨励賞:奨励賞に応募されたすべての学校と担当された先生に贈られます。**

日米協会より本選応募作品の中から、国際理解や国際交流の観点で優れた作品(3名)に贈られます。

## 日米協会会長賞



一般社団法人 日米協会  
会長  
**藤崎 一郎 様**



一般社団法人 日米協会  
専務理事  
**岡本 和夫 様**

※入賞された方については、後日、応募いただいた先生のメールアドレス宛に表彰式の日程をお知らせします。  
※本コンテストに関わる情報は、随時公式サイト(<https://iibc.me/essay>)にてお知らせします。



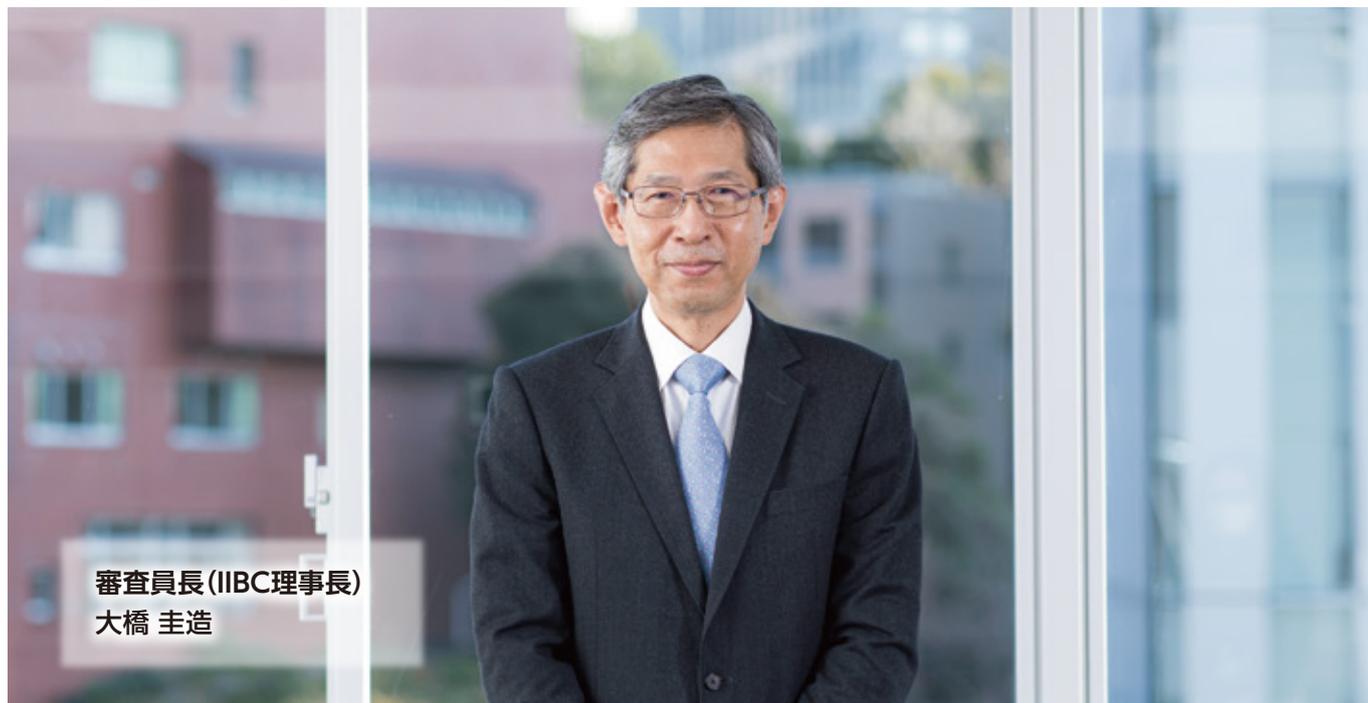
## 個人情報の取扱いについて

ご提出いただいたエッセイおよびご担当者様の個人情報は、コンテストの運営、入賞者への通知、表彰状・賞品送付等に利用します。また、次年度のIIBC高校生英語エッセイコンテストに関連するご案内、IIBCが主催・協賛・後援するイベントおよびTOEIC Program各種テスト関連のご案内、前述の目的達成のための電話・メール・FAX・郵便による連絡に利用いたします。表彰式当日はご参加いただいた方々のお写真を撮影させていただきます。入賞作品(学校名・生徒氏名)や表彰式参加者のお写真は公式サイト内での発表、当方資料ならびに報道発表資料としても利用させていただくことがあります。お預かりした個人情報は、上記利用目的のために契約を締結した委託先に預託します。

インターネットのシステム障害やメールアドレスの誤り、郵便事故などにより、個人情報および応募作品を紛失された場合の責任は負いかねますのでご了承ください。個人情報の利用目的の通知、開示、訂正、追加、削除、利用の停止、消去等を希望される場合は、IIBC高校生英語エッセイコンテスト事務局(iibc-essay@iibc-global.org)までお問い合わせください。

上記の個人情報の取扱いに同意の上、ご応募くださいますようお願いいたします。 個人情報保護管理者:(一財)国際ビジネスコミュニケーション協会 マーケティング本部 本部長

審査員長の一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会(IIBC) 理事長 大橋より、新しいテーマ「身近な異文化体験～コミュニケーションを通じた響きあい～」に込めた思いをご説明いたします。



審査員長 (IIBC理事長)  
大橋 圭造

2009年度から始まった本コンテストは、今年度で14回目を迎えます。今回よりテーマを新たに、「身近な異文化体験～コミュニケーションを通じた響きあい～」としました。テーマの中に「響きあい」という言葉を盛り込んだのには、ある思いがあります。

よく「日本人」とひとくくりにされることがありますが、ひとり一人を見ると、育ってきた環境も違えば、1つの事象に対する感じ方や価値観も異なります。同じ国・地域で暮らしている人たちでさえそうなのですから、文化や習慣、そして言語が異なる海外の方と接するときには、その違いはもっと大きくなります。

そうした場面で必要になるのは、相手のバックグラウンドを理解するように努めながら、こちらのバックグラウンドについても、しっかりと相手に伝える努力をすることです。さらに、一歩踏み込んで、相手の生き方や考え方を深く理解すれば、それに触発され、自分自身の生き方や考え方も、大きく変わることがあります。そのとき、おそらく相手もこちらに触発されて、何らかの変化を遂げているはずで、これが、相互触発による「響きあい」です。

グローバルな場面で、さまざまな価値観を持つ人たちとコミュニケーションを取りながら、より良く、より深い関係を築いていくためには、この「響きあい」の瞬間をどれだけ作れるかが大切になると私は考えています。

高校生の皆さんも、自分とは価値観が異なる人と共に行動し言葉を交わす中で、お互いに触発される「響きあい」を経験したことがあるのではないのでしょうか。皆さんにはそうした経験を、分かりやすく、かつ論理的な英文で表現していただきたいと考えています。また、テーマの中に「異文化体験」という言葉が含まれていますが、ここでいう異文化とは、自分と異なる価値観を持つ相手のことをいいます。その相手は日本人でも、同級生でも、もちろん海外の方でも構いません。

日本語とは言語体系が異なる英語を使い文章を書くという行為は、それ自体が一種の異文化体験でもあります。どうか楽しみながら、この知的な体験に取り組んでみてください。

最後に、グローバル人材育成にとって不可欠な、異文化理解力と英語表現力の向上を図るという本コンテストの趣旨に賛同され、生徒の指導にあたっておられる高校の先生方には、改めて厚く御礼申し上げます。

第13回(2021年)で最優秀賞と日米協会会長賞、そしてアルムナイ特別賞をトリプル受賞した矢野さんに、今回の作品を書いた体験についてうかがいました。



### — エッセイのテーマはどのように決めましたか？

中学2年生のときに学校の派遣留学プログラムでアメリカのボーディングスクールに7ヶ月ほど通っていた際に、ライティングの授業で感じていたことをエッセイにしました。留学期間を通し一番印象に残った出来事でしたので、このトピックであれば自分の気持ちを強く表現できると思いました。

### — エッセイを書いたときのプロセスを教えてください。

最初に構造やアウトラインを決め、そのプランに沿って書き始めました。最も工夫したのはイントロダクションです。読み手の興味を惹きつけるものにしたかったので、表現が異なるイントロダクションを4つほど準備し、全体を書き終えた後にふさわしいものを選びました。最後にいらぬ文章や表現を見直し、文字数の調整をしました。費やした時間は約2週間です。

### — エッセイを書く上で難しかったことはありますか？

第二次世界大戦などセンシティブな話題も取り入れたため、中立の立場を保ちながら自分の意見を述べるのが難しかったです。的確なワードチョイスになるよう意識して書き進めました。状況や詳細を読者にわかりやすく説明することも、想像以上に難しかったです。読み手を飽きさせないよう引用を使ったり、形容詞を用いるなどで工夫しました。

### — 最優秀賞、日米協会会長賞およびアルムナイ特別賞を同時受賞されました。結果を知ったときにどのように感じましたか？

自分にとって満足のいく作品に仕上がったとは思っていましたが、まさか受賞できるとは想像していなかったので、頭が真っ白になりました。私の作品を選んでくださった審査員の皆様には、感謝の気持ちでいっぱいです。両親をはじめ、先生や友達と一緒に喜んでくれました。

### — 表彰式に参加した感想を教えてください。

表彰式でトロフィーをいただき、ようやく受賞の実感がわきました。審査員の方のお話から学ぶことが多かったです。他の受賞者とも直接お話しすることができ、大変有意義な時間になりました。

### — 普段の英語学習について教えてください。

学校の授業で600~800文字程度のエッセイやジャーナルを書いています。スピーキングでは話したいことが咄嗟に出てこないことも多いのですが、ライティングは時間をかけられる分、主張したいことをしっかりまとめられるので自分に向いていると感じています。また最近、クラシックをはじめとした洋書をたくさん読むようにしています。読書で培った単語や表現のストックが、エッセイライティングにも役立つなと感じます。

### — 将来の夢や目標はありますか？

まだ模索中ですが、英語を生かせる職業に就きたいと考えています。大学でも機会があれば留学にチャレンジしたいです。

### — 最後に、本コンテストに参加を検討している高校生にアドバイスをお願いします。

純粋な気持ちで、楽しみながら書いてみてください。あまり飾りすぎず、自分の意見を率直に述べるのが大切だと思います。

2014年より毎年ご応募いただいている北海道札幌国際情報高等学校の木村先生に、話をうかがいました。



北海道札幌国際情報高等学校(北海道)  
木村 準一 先生

— 北海道札幌国際情報高等学校の生徒さんには2014年から毎年、ご応募いただいています。応募を継続されている理由を教えてください。

例年、国際文化科2年生の「英語表現」という授業の中で、コンテストへの応募を前提としたエッセイライティングを取り入れています。国際文化科は英語に特化した学科ですので、IIBC高校生英語エッセイコンテストに向けたライティングは生徒の英語表現スキルのレベルアップを図るため、また手法を学ぶという面でも有意義であると感じています。

— どのように指導されたのでしょうか。

指導に関しては、私とALTの2名体制で行いました。英語のライティングは日本語と形式が異なりますので、パラグラフの組み立て方からスタートし、パラフレーズなどのテクニックについても少しずつ取り入れていきました。最終的に夏休みの宿題にしましたが、それを併せると正味1ヶ月ほどですね。また生徒同士でペアになって内容を確認し合ったり、お互いの意見を聞き合う時間も設けました。そうすることで自然なインタラクションが生まれやすくなり、互いに切磋琢磨することのできるいい機会になったのではないかと感じます。

— 生徒の皆さんは、どのような気持ちで取り組まれたと感じますか？

評価対象になることを明言していたことも手伝い、多くの生徒が大変意欲的に取り組んでいました。正直なところ分量も多く、限られた時間の中で仕上げなければなりませんから、タフな挑戦だとは思いますが、達成感を得られる良い通過点となったのではないのでしょうか。表面的な書き方しかできなかった生徒が長めのセンテンスをかけるようになったり、語彙が増えるなどの変化も起こり、その過程で自信をつけていく姿も多く見受けられました。

— 全てのエッセイにネイティブのフィードバックをつけてお返ししております。フィードバックについての感想があれば教えてください。

普段は私とALTがペアになりフィードバックをしていますが、それとはまた異なる視点で評価をいただくことができるので、大変ありがたかったです。作品をポジティブに捉え、いいところを取り上げて褒めてくださるので、生徒たちのモチベーションアップにも効果的だと感じました。

— 最後に、本コンテストに参加を検討している生徒や先生にアドバイスをお願いします。

ぜひたくさんの方の高校生に挑戦してほしいですね。ライティングは4技能の中でも敷居が高く、文字にして表現すると間違いが明確に分かりますし、レベルの高い単語が求められたり、文構造を知る必要性も出てきます。そういったことを考えると、取り組むのが怖いという気持ちが出てくるのも分かります。それは恐らく英語学習者であれば、誰もが持つ感情でしょう。しかし、実際に取り組んでみることで得られるものはとても多いはずですよ。エッセイライティングの基礎や道しるべを学びながら少しずつ進めていけば、最後は必ず完成までたどりつきます。ぜひ前向きに取り組んでみてください。またこれは、我々教員にとっても、大きな学びのある活動だと思います。準備や添削などに手間はかかりますが、同時に生徒たちの成長を見守りながら伴走することができる、素晴らしい機会となるはずです。

## 第1回より審査員を務める東京国際大学の松本茂先生に、応募作品の審査におけるポイントや英語でエッセイを書く意義についてお話をうかがいました。



東京国際大学教授  
立教大学名誉教授  
NHKラジオ「基礎英語」全体監修者  
松本 茂 先生

### —審査をする際に大切にしているポイントを教えてください。

松本先生：一番は構成です。英語の語彙や文法などももちろん大切ですが、それよりもエッセイ全体の流れに注目しています。文脈に違和感がなく、ストンと落ちる内容になっているか。オリジナリティがあり、心に響くポイントがあるかどうか。オリジナリティといっても、何も特別な体験が必要なのわけではありません。一般的な出来事であっても、そこに新しい解釈を見出して提示してくれたら良いのです。みんなが“当たり前”だと思って過ごしていることを、“当たり前ではない”として提起する。それは面白い試みです。そういった独自性が、読む人の心を打つのだと思います。

### —応募作品をさらに良くするためのアドバイスがあれば教えてください。

松本先生：1回読んだだけで何を主張したいかがわかる論理構成になっているということが、まず最低限のルールです。そこに、独自のエッセンスがちりばめられているということ。エッセイは、基本的には論証文です。ですから構成は、「序論」「本論」「結論」の流れで進めないといけません。まず、このエッセイにおいて何を主張するのかを述べ、次にその理由を書く。その中でサポートのマテリアルを入れ、結論で締めるというのが基本的な流れになります。この流れで構成されていないと、結局何が言いたいかわからない文章になってしまいます。半ばまで読んでも意味がわからないようでは、エッセイとしては成り立っていません。具体的には、まず“こう思う”という主張・結論を先に述べ、最初のパラグラフを読んだ時点で、ある程度その後の予測がつく構成にしましょう。次に自分の体験だけではなく、一般的な例をリサーチして盛り込みます。テーマが社会的な問題であればデータや専門家の意見を引用するなど、客観的なデータがあると説得力が増します。エッセイでは、論理と感情のバランスが大切で、心が強くならずではいけません。もちろん、バラエティに富んだエピソード

があった方が面白いかもしれませんが、メインは論理を作ることです。結婚式などの特別な場面では“感動”が必要であることもありますが、エッセイでそれをする必要はありません。論理がまっすぐに流れるように書いてください。

### —高校生がエッセイを書くことや英語で書くことの意義を教えてください。

松本先生：論理的なエッセイの書き方が身につけば、大学入試や大学の講義でも十分力を発揮出来るはずですよ。大学入試での作文は長くても100ワードくらいの出題ですが、その評価項目も論理がきちんと流れているかがメインになります。また、社会に出たときに求められるのは論理的視点ですから、大学でもそこを重要視しています。そういった意味で、高校生がエッセイを書くことは非常に有意義であると思います。次に英語で書くことについてですが、英文を書くということは、英語を話す訓練に繋がります。実際に書いてみると、スペリングが分からなかったり、接続詞で迷ったりしてその都度調べるようになるので、英語の正確さもアップしていきます。しかし、もともとある和文を英文に書き直す作業だけを繰り返しても、一向に自分の考えを表現できるようになりません。ですから、毎日自分の意見を英語で書くと良いと思います。40~50ワード程度の短いもので構いません。毎週テーマをもって、例えば「スポーツ」であれば、1週間毎日違うスポーツについて書く。そこで構成力も養われますし、書き続けていけばスピードも速くなってきます。もちろん最初は全く書けないかもしれませんが、それで良いのです。“書きたいことが書けない”という体験をすると、自分には何が足りないのかということに注目するようになり、学習時の意識が変わっていきます。

### —身につけた英語をどう活用してほしいですか？

松本先生：最近では法律・会計事務所などでも英語を必要としていますし、新人研修の講師が全員外国人ということもあるようです。今後、英語が出来る人と出来ない人の差はますます開いてしまうでしょう。そういう時代ですから、逆に言えば英語が出来るといっただけで、大きなチャンスを掴めます。どんな仕事においても、確実に可能性が広がりますから、目指す分野に関係なく英語を身につけ、自分の将来にうまく活かして欲しいと思います。

### —本コンテストに参加する高校生にメッセージをお願いします。

松本先生：どんな「異文化」を体験したことがあるのかな。その「体験」を通して相手や周りの人々とのコミュニケーション（関係性）にどんな変化が生じたのかな。そして、自分はどう変わったのかな。こんなことを考えてトピックを探してみてください。そのうえで、一連の異文化体験のことと、その体験から得た「気づき」をなぜ読み手と共有したいのかを考えながらエッセイを書いてください。あなたのエッセイを読むことを楽しみにしています！



一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会  
The Institute for International Business Communication

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 IIBC高校生英語エッセイコンテスト事務局

E-Mail : [iibc-essay@iibc-global.org](mailto:iibc-essay@iibc-global.org) IIBC公式サイト : <https://www.iibc-global.org>